

# 強者の戦略

東大日本史のみかた 39 [解答編]

こんにちは。日本史の岡上です。さて、今回は江戸時代の貿易や国内経済について問う問題でした。同様の話題は東大でも過去に出題されており、過去問をしっかりと研究している人にとっては、比較的考えやすい問題だったのではないのでしょうか。

それでは解説を始めていきましょう。

## <江戸時代の輸入品の国産化>

設問

A 幕府が(2)～(4)のような政策をとった背景や意図として、貿易との関連では、どのようなことが考えられるか。2行以内で述べなさい。

問われているのは、江戸幕府が資料文(2)～(4)のような政策をとった背景や意図としてどのようなことが考えられるか。条件として、貿易との関連を考えることが求められています。

まずは(2)～(4)の政策がどのようなものか、みていきましょう。

(2) 江戸幕府は1685年に、長崎における生糸などの輸入額を制限した。1712年には京都の織屋に日本産の生糸も使用するよう命じ、翌年には諸国に養蚕や製糸を奨励する触れを出した。

(3) 1720年には、対馬藩に朝鮮人参を取り寄せるよう命じ、栽培を試みた。その後、試作に成功すると、1738年には「江戸の御用達町人に人参の種を販売させるので、誰でも希望するものは買うように」という触れを出した。

(4) 1727年に幕府は、薩摩藩士を呼び出し、その教えに従って、サトウキビの栽培を試みた。その後も引き続き、製糖の方法を調査・研究した。

ポイントを箇条書きにしてみましょう。

資料文(2)

- ・1685年、長崎における生糸などの輸入額を制限。
- ・1712年、京都の織屋に日本産の生糸の使用を命じる。
- ・1713年、諸国に養蚕や製糸を奨励。

# 強者の戦略

資料文(3)

- ・1720年、対馬藩に朝鮮人参を取り寄せさせる（その後、朝鮮人参の栽培に成功）。
- ・1738年、江戸の御用達町人が扱う人参の種を、希望する者は誰でも買うようにうながす。

資料文(4)

- ・1727年、薩摩藩士の指導のもと、サトウキビの栽培を試みる（その後も、製糖の方法を調査・研究）。

これらをまとめれば、幕府が生糸・朝鮮人参・砂糖の国内での生産を奨励するという政策を実施していたことがわかります。

では何故そのような政策をとるに至ったのでしょうか。それは資料文(1)から読み取ることができます。

- (1) 17世紀を通じて、日本の最大の輸入品は中国産の生糸であった。ほかに、東南アジア産の砂糖や、朝鮮人参などの薬種も多く輸入された。それらの対価として、初めは銀が、やがて金や銅が支払われた。

ここから生糸(=中国産)、砂糖(=東南アジア産)、朝鮮人参(=朝鮮産)はいずれも17世紀を通じて多く輸入されたものであったことが分かります。

つまり、幕府は18世紀前半に**主要な輸入品の国産化を図ろうとしていた**とまとめることができます。

これで解答を書いてしまいそうになりますが、まだまだ。あくまで答えなければならないのは、その政策をとった「背景や意図」になります。条件である貿易との関連を念頭に考えていきましょう。

ここで確認したいのは、資料文(1)の「それらの対価として、初めは銀が、やがて金や銅が支払われた」、資料文(2)の「江戸幕府は1685年に、長崎における生糸などの輸入額を制限した」という表現です。これらが輸入品の国産化とどのような関連するのでしょうか。

まず、思いつくのは**17世紀後半以降、佐渡相川金山や石見大森銀山に代表される国内の金銀産出量が減少**していることです。また、**同時期には中国船、オランダ船の長崎来航が増加**していることにも気がつくはずですが(このあたりは1715年に海舶互市新例(正徳新令)で輸入額の制限が行われていることも知っているはずですし、過去の出題(2009年度第3問など)でも扱われていましたね)。

つまり、**国内の金銀産出量が減少する一方で、貿易額が増加していたため、貿易額を抑制して金銀の流出を抑えることを目的に、幕府は(2)~(4)のような政策をとった**とまとめることができます。

以上をまとめて、解答を作成してみましょう。

## 【解答例】

A17世紀後半以降、金銀産出量が減少する一方で貿易額が増加したため、主要輸入品の国産化を図り、金銀の流出を抑えようとした。(60字)

# 強者の戦略

## <元禄時代の消費生活>

### 設問

B そうした政策をとった背景として、国内の消費生活において、どのような動きがあったと考えられるか。それぞれの産物の用途に留意して、3行以内で述べなさい。

問われているのは、そうした政策＝(2)～(4)のような政策をとった背景として、国内の消費生活にどのような動きがあったのか。条件として、それぞれの産物の用途に留意することが求められています。

「消費生活」というワードから、まずはこの時期の経済状況を確認しておきましょう。

資料文(2)～(4)では1710年代～30年代の出来事が並んでいますが、この時期は新井白石を中心とした正徳の治、そして将軍吉宗による享保の改革の時期になります。この時期は品位の高い正徳金銀、享保金銀が発行されており、そのため貨幣流通量が抑制され、また幕府による倹約が奨励された時代でもありました。

では、その前の時代といえど…そう、元禄時代ですね。元禄時代といえば幕政の安定期であり、東廻り航路・西廻り航路の発達により全国的な流通網が整備され、特に大坂が「天下の台所」として発展した時代でもあります。また、品位を下げた元禄金銀の発行による貨幣流通量の増加が、経済発展を促進させた時代でもありました。

つまり、幕府が(2)～(4)のような政策をとった背景には**経済の発展**があり、そのなかでの国内の消費生活の動きを考えていけばよいということが分かります。

では、当時の消費生活を考えていきますが、ここで大事なのは、誰が(どんな階層の人物が)消費をしていたかということです。現代のように、誰もが消費生活をするという時代ではありませんので、あ

る程度、見当をつけていく必要があります。

まず元禄時代において消費生活を送っていた階層として想定されるのが、将軍や大名、またその家臣などの武士身分の人々です。参勤交代の実施を通じて、上方の高級品・嗜好品を将軍・幕府への献上品として持参するといったエピソードが浮かんだ人もいないのでしょうか。

そして、次に都市の町人。特に商人層は経済の発展の中心的な役割を担い、多くの富を蓄積していきました。また消費生活は都市部だけでなく、農村部にも浸透していきました。すべての村々の百姓とまではいきませんが、いわゆる豪農と呼ばれるような人々は豊かな消費生活を送っていたと考えられます。

ではここで条件の「産物の用途」を考えてみましょう。まず生糸は絹織物の原料であり、まさに「高級品」といえます。資料文(2)には「京都の織屋」という表現もあり、「西陣織」を想起することもできますね。

また朝鮮人参は資料文(1)によれば薬種とあります。今でもそうですが、朝鮮人参と言えば滋養強壯の薬として有名ですね。

そして砂糖はいまでもなく菓子原料で、このあたりは「嗜好品」といえるでしょう。

つまり、**消費生活の広がりにより高級品・嗜好品の消費が増大していった**のです。

以上をまとめて、解答を作成しましょう。

### 【解答例】

B 経済が発展するなか、消費生活が武士層だけでなく都市町人層、豪農層にも広がり、生糸を原料とする絹織物などの高級品、朝鮮人参などの薬種、砂糖を使った菓子などの嗜好品の消費が増大した。

(90字)

さて、みなさんの解答はいかがだったでしょうか？

論述問題の解答はもちろん一つではありませんの

# 強者の戦略

で、「これはどうだろうか？」と自分では判断つかないものは必ず、添削してもらうことをお勧めします。この『強者の戦略ホームページ』でもメールにて質問などを受け付けていますので、どしどし送ってきてくださいね。

それでは、今回はこの辺にいたしましょう。次回「東大日本史のみかた」をお楽しみに！！